

## 英語の場所格交替動詞の拡張用法

— 仮想変化表現の観点から —\*

野中大輔

dnonaka200@gmail.com

キーワード： 場所格交替 形容詞的受身 仮想変化表現

### 要旨

英語の load や spray といった動詞は、ほぼ同一の内容を二通りの構文で表現することができる (移動物目的語構文 John loaded hay onto the truck / 場所目的語構文 John loaded the truck with hay)。この現象は場所格交替 (locative alternation) と呼ばれている。場所目的語構文が形容詞的受身として用いられると、しばしば意味拡張をすることが指摘されている (e.g. John is loaded with talent)。本稿では、このような表現が場所目的語構文と形容詞的受身の単なる組み合わせでは説明できない独自の構文として認められること、そして、それは Matsumoto (1996) のいう仮想変化表現 (subjective-change expression) の一種であることを主張する。

### 1. はじめに

英語の動詞 load や smear は、ほぼ同一の内容を二通りの構文で表現することができる。この現象は場所格交替 (locative alternation) と呼ばれている。以下、移動物 (hay や paint) が目的語になっている構文を移動物目的語構文、影響を受ける場所 (the truck や the wall) が目的語になっている構文を場所目的語構文と呼ぶ。

- (1) a. John loaded hay onto the truck. (移動物目的語構文)  
b. John loaded the truck with hay. (場所目的語構文)
- (2) a. Jack smeared paint on the wall.  
b. Jack smeared the wall with paint.

興味深いことに、場所目的語構文が形容詞的受身で使われると、しばしば意味拡張が起こることが指摘されている (Laffut and Davidse 2002)。たとえば、動詞 load でいえば、次の

---

\* 本稿は、「言語と人間」研究会第38回春期セミナーにおけるポスター発表「場所格交替動詞の拡張用法: Subjective-change expression の観点から」(2013年3月23日、日本女子大学)の内容に加筆・修正を施したものである。本稿の執筆にあたり、西村義樹先生(東京大学)と高見健一先生(学習院大学)から大変貴重な助言をいただいた。また、堀内ふみ野氏(慶應義塾大学大学院生)、平沢慎也氏(東京大学大学院生)、貝森有祐氏(東京大学大学院生)との議論が有益であった。ここに記して感謝申し上げる。

ような例が該当する。

- (3) a. Her voice was loaded with meaning.  
 b. Her eyes were loaded with tears.  
 c. John was loaded with talent.

上記の例は「彼女の声は意味深であった」「彼女の目には涙がたまっていた」「ジョンは才能に恵まれていた」という意味である。一般的に形容詞的受身は出来事の結果状態を表すが、(3)の例はloadが表す積み込みの結果とは言えないような意味で解釈されている。本稿では、このような表現が場所目的語構文と形容詞的受身の単なる組み合わせでは説明できない独自の構文 (Goldberg 1995) として認められること、そして、それは Matsumoto (1996) のいう仮想変化表現の一種であることを主張する。

## 2. 場所格交替

場所格交替は、構文交替現象の一種として、様々な言語理論から研究されてきた。<sup>1</sup> 研究が進むにつれ、交替する二つの構文の意味が完全に同一というわけではないことが認識されるようになった。Pinker (1989) は、移動物目的語構文では移動物の移動に焦点が当たっているのに対して、場所目的語構文では場所の状態変化に焦点が当たっていると主張した。この説は理論的な枠組みの違いを超えて広く受け入れられている。このような違いは、以下のような疑似分裂文の例からも確認できるだろう。

- (4) a. What Bill did to the books was load them onto the truck.  
 b. ?What Bill did to the truck was load the books onto it. (Jackendoff 1990: 130)  
 (5) a. What Bill did to the truck was load it with the books.  
 b. \*What Bill did to the books was load the truck with them. (ibid.)

(4)の移動物目的語構文は移動物に焦点を当てた表現なので、移動物を話題とする疑似分裂文とは整合性があるのに対して、場所を話題とする疑似分裂文では表現しづらい。逆

<sup>1</sup> 場所格交替は、下位分類として (a) 移動物を何かの表面や容器へ移動させることを表す他動詞 (load など) を含むもの、(b) ある場所からの除去を表す他動詞 (clear など) を含むもの、自動詞 (swarm など) を含むものの三種がある。このうち、本稿では (a) に限定して議論する。このタイプの場所格交替には、以下の動詞が現れることが知られている (岸本 2001: 105)。

- (i) 塗り込み: brush, dab, daub, plaster, rub, slather, smear, smudge, spread, streak  
 (ii) 積み上げ: heap, pile, stack  
 (iii) 放出: inject, spatter, splash, splatter, spray, sprinkle, squirt, scatter, sow, strew  
 (iv) 詰め込み: pack, cram, crowd, jam, stuff, wad  
 (v) 積み込み: load, pack, stock

に、(5) の場所目的語構文は場所に焦点を当てた表現なので、移動物ではなく場所を話題とする疑似分裂文が用いられる。

上記のような違いはあるが、構文交替として扱われていることからわかるように、二つの構文は同じ事態を描写するのに用いることができ、その違いは事態をどの側面から捉えるかという視点の転換 (Pinker の用語でいう *gestalt shift*) に由来すると考えられている。

### 3. 形容詞的受身と場所格交替

英語には、動詞的受身 (*verbal passive*) と形容詞的受身 (*adjectival passive*) という二種類の受身がある (Huddleston and Pullum 2002; 影山 2009)。<sup>2</sup> 動詞的受身は、被動者に何が起こったのかという出来事を描写するのに対して、形容詞的受身は、出来事の結果、被動者がどのような状態にあるのかを描写する。

両者は、形式上はどちらの意味にも取れることがあるが、形容詞的受身の特徴 (i) 行為に参加する動作主を *by* 句で表現することはできない、(ii) *be* 以外に *seem*、*remain* などの動詞が使用できる、などを手掛かりとして区別をすることができる。

- (6) a. The window was broken. (曖昧)  
 b. The window was broken by vandals. (動詞的受身)  
 c. The window remained broken. (形容詞的受身)

(Huddleston and Pullum 2002: 1439)

Levin and Rappaport (1986) は、場所格交替に関わる二つの構文が形容詞的受身で用いることができるかどうかを議論している。両構文は、少なくとも前置詞句を伴う場合はどちらも形容詞的受身を形成し、行為の結果としての位置や状態を描写することができる。<sup>3</sup>

- (7) a. The feathers remained stuffed in the pillows.  
 b. The pillow remained stuffed with feathers. (Levin and Rappaport 1986: 650)

ここまで提示した形容詞的受身の例では、結果のみが焦点化されているとはいえ、そ

<sup>2</sup> 多くの研究者は「受身」を動詞的受身のみを指す用語として捉えており、形容詞的受身は厳密には受身ではないと考えている。たとえば、Quirk et al. (1985) は出来事を表す受身を *central passives*、状態を表す受身を *pseudo-passives* と呼び区別している。また、Huddleston and Pullum (2002) は、形容詞的受身という用語の「受身」は拡張的な意味でのものだと述べている。本稿でも Huddleston and Pullum のように広い意味で「受身」という用語を用いる。

<sup>3</sup> 前置詞句がなく、移動物か場所のどちらかの名詞が欠けている場合には、動詞によって形容詞的受身をつくれるかどうかには制限がある。たとえば、*stuff* の場合、(7a) から場所を含む前置詞句を省略すると容認されなくなる。

(i) \*The feathers remained stuffed.

(Levin and Rappaport 1986: 636)

の結果をもたらした行為はたしかに存在していた。(7a) は羽毛の位置、(7b) は枕の状態を述べているが、どちらの場合も、だれかが羽毛を枕に詰め込むという先行する行為が想定できる。しかし、Laffut and Davidse (2002) は COUBILD コーパスで場所格交替の構文を調べることで、上記とは異なる (8) のような形容詞的受身が数多く存在することを明らかにした。これらの例では、先行する行為の動作主、あるいは行為そのものを想定することができない (Laffut and Davidse 2002: 197-198)。

- (8) a. An unidentified man lying twisted on the pavement, his face and chest smeared with blood.  
 b. The courtroom was packed with reporters and spectators.  
 c. Houston was a man crammed with guilty knowledge.

たとえば、(8a) であれば男性の顔や胸が血まみれになっていることが表されているが、これはだれかが血を塗った結果ではない。また、(8b) は法廷に記者や傍聴人がたくさんいることを表しているが、だれかが法廷に入るように指示した結果ではない。(8c) はヒューストンという人物に犯罪の意識があることを表しているが、それを詰め込むという先行する行為があったかどうかは、通常想起されない。(8) の例が先行する行為の結果としてではなく単純な状態や属性を描写している表現であることから、Laffut and Davidse は、場目的語構文と形容詞的受身が組み合わさった場合には、意味拡張が起こることがあると述べている。<sup>4</sup>

(8) のような例は、メタファーの一種であると考えられるかもしれない。本稿は (8) の表現が成立する要因としてメタファーが関与している可能性を否定しないが、しかし、仮に (8) を動機づけるのがメタファーであると言うだけなら、以下のような表現の容認性について説明することはできないだろう。

- (9) a. \*Mary loaded meaning into her voice.  
 b. \*Meaning was loaded into her voice.  
 c. \*Mary loaded her voice with meaning.  
 d. Her voice was loaded with meaning. (=3a)
- (10) a. \*Mary loaded tears into her eyes.

<sup>4</sup> 形容詞的受身が意味拡張を起こすこと自体は珍しくはない。Huddleston and Pullum (2002) は、形容詞的受身の意味が変化し、対応する能動文とは歴史的にしか関係がなくなってしまった例を挙げている。

(i) She's bound to win.

(ii) His days are numbered.

(iii) Are you related?

(Huddleston and Pullum 2002: 1440)

しかし、このような意味拡張の可能性が構文交替の二つの構文で異なるとしたら、それは注目に値する現象であると言える。

- b. \*Tears were loaded into her eyes.  
 c. \*Mary loaded her eyes with tears.  
 d. Her eyes were loaded with tears. (=3b)
- (11) a. \*Nature loaded talent into John.  
 b. \*Talent was loaded into John.  
 c. \*Nature loaded John with talent.<sup>5</sup>  
 d. John was loaded with talent. (=3c)

英語母語話者に尋ねた結果、上記の例のうち容認されるのは (d) のみであるという判断を得た。つまり、移動物目的語構文では場所目的語構文に対応する表現が形容詞的受身であっても成立せず、また、場所目的語構文でも結果を引き起こす行為そのものを能動文で表現することはできないのである。したがって、このような表現は、場所目的語構文と形容詞的受身の知識を足し合わせても、メタファーとして考えても説明できない側面があると言える。Goldberg (1995) は、統語構文について、全体の意味が構成要素やほかの構文からは予測できない場合、それは独自の構文と認められると述べているが、場所目的語構文と形容詞的受身が組み合わさった拡張的な用法は Goldberg の言う構文の一種であると考えられるだろう。

#### 4. 仮想変化表現としての形容詞的受身

このような表現が、先行する行為が想定されない、単なる属性や状態を表す表現だとしたら、以下に見るように形容詞文とよく似ていることになる。(12a) と (12b) では、意味に違いがあるのだろうか。

- (12) a. John was loaded with talent. (=3c)  
 b. John was full of talent.

その疑問に答えるにあたって、Matsumoto (1996) の仮想変化表現 (subjective-change expression) の研究を参照することが有効だと思われる。<sup>6</sup>

<sup>5</sup> 交替動詞ではないが、endow であれば (9c, d) に相当する表現はどちらも可能である。『ジーニアス英和辞典』は、人に才能などを授けるという意味の endow について、「通例受身」と表記はしているが、能動文の例も挙げている。

(i) Nature endowed her with both a sound mind and a sound body.

(ii) She was endowed with both a sound mind and a sound body. (ジーニアス英和辞典 第4版)

<sup>6</sup> 英語の subjective という語は「主体(的)」と訳されることがあるため、subjective-change expression には「主体(的)変化表現」という日本語を当てることもできる。しかし、日本語学ですでに「主体変化」が別の現象を指す用語として用いられているため (cf. 日本語記述文法研究会 2007)、本稿では「仮想変化」という語を採用することにした。

仮想変化表現とは、ある状態について、仮想的な変化の結果として描写する表現である。Matsumoto は、日本語のテイル形が通常の結果表現はもちろん、仮想変化表現にも用いられると主張している。

- (13) a. 葉っぱがたくさん落ちている。  
 b. 石がたくさん落ちている。 (Matsumoto 1996: 126)
- (14) a. この部屋は丸くなっている。  
 b. 家が二軒くっついている。 (ibid.: 124)

(13) は通常の結果表現である。葉っぱや石の位置を落ちるという変化の結果として表している。それに対して、仮想変化表現である (14) の場合、実際に部屋の形や家の位置に変化が起こったわけではないが、まるで変化があったかのように描写しているのである。

仮想変化表現でいう変化とは、一般的な状態や理想的な状態からの変化である。たとえば (14a) は、部屋は四角いはずであるという話し手の想定とは合致しなかったために、部屋の形状を意外に思っていることが示唆されている。Matsumoto は、仮想変化表現は、意外な状態は通常予期される状況からの変化として感じるという話し手の認識を反映したものだと述べている。(14a) は、話し手が部屋の形状を意外であると感じている点が、「この部屋は丸い」のような単なる形容詞文とは異なるのである。

Matsumoto (1996: 148) は、英語では仮想変化表現に形容詞的受身が利用されると述べている。以下のような図形に言及する場合、日本語でも英語でも理想的な四角形から変化があったかのように表現されるが、日本語のテイル形に対応しているのは形容詞的受身である。



- (15) 角が {欠けている / 取れている}。  
 (16) The corner is {cut off / rounded off}.

英語の形容詞的受身が仮想変化表現として用いられるのなら、John was loaded with talent のような表現もその一種であると言えるのではないだろうか。通常の状態からの逸脱としての表現は、John was full of talent のような形容詞文と比べて話し手の事態に対する意外性や感情を伝える機能をもっていると考えられる。

実際、そのことを反映した辞書の記述がある。以下に見るように *Longman Dictionary of Contemporary English* (LDOCE) や *Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary* (COBUILD) には動詞の *load*、*smear* とは別に、形容詞として *loaded*、*smear*ed の記載がある。これらには、動詞用法には記述のなかった感情や評価の意味合いが追加されている。(a) が動詞の定義、(b) が -ed 形の形容詞の定義、(c) が形容詞の項目に載っていた例文である。下線は筆者による。)

- (17) a. load: to put a load of something on or into a vehicle; to put bullets into a gun, a film into a camera etc  
 b. loaded: to be full of a particular quality, attitude etc, or contain a lot of something, especially something bad  
 c. Your paper's loaded with spelling mistakes. (LDOCE 第3版)<sup>7</sup>
- (18) a. smear: If you smear a surface with an oily or sticky substance or smear the substance onto the surface, you spread a layer of the substance over the surface.  
 b. smeared: If something is smeared, it has dirty or oily marks on it.  
 c. The other child's face was smeared with dirt. (COBUILD 第5版)

英語母語話者は、もはやこれらを形容詞的受身というよりは単なる形容詞として感じているかもしれない。しかし、上記のような記述は、それらの意味が仮想変化表現で見られるような、感情を伝える機能を反映していると言ってよいだろう。

## 5. 状態と属性

前節では、場所目的語構文が形容詞的受身で用いられたときの拡張的な用法を仮想変化表現の一種として扱えることを主張した。そのように考えれば、通常の形容詞文との違いも説明できる。

ただし、このような拡張的な用法も、よく観察すると一様ではないことがわかる。

- (19) a. John was loaded with talent. (=3c, 12a)  
 b. His meals are packed with calories.  
 (20) a. Her eyes were loaded with tears. (=3b)  
 b. His face was smeared with blood.

<sup>7</sup> bad は言い過ぎであると感じられたのか、第4版では下線部が削除されている (実際、John was loaded with talent は肯定的な意味合いで用いられると考えてよいだろう)。しかし、辞書編集者が loaded に何らかの感情的な意味合いを認識していたのは確かだと思われる。

先ほどから取り上げている (19a) であれば、何かはジョンに才能を授けるという事態が事前にあったわけではないが、その結果であるかのような捉え方がなされているのである。(19b) も同様で、本来低カロリーだった食事にカロリーを加えたということではない。つまり、(19) の例は人や物がもともと持っている属性を表しており、そのような属性を得るにあたって何らかの変化があったことを前提としない。一方、(20) では事情が異なる。目に涙がたまった状態や顔に血が付着している状態はあくまで一時的なものであり、問題となっている状態になるには、通常の状態から実際に変化があったことは間違いない。<sup>8</sup>

しかし、(20) は感情が高まって自然と涙がたまってしまう場合や、顔にけがをした後に血が出てきてしまった場合の描写に用いるのであって、動詞が表すような、積み込みや塗りつけの結果を描写しているのではない。したがって、実際には動詞が示すような出来事が起こっていないにもかかわらず、あたかもそれが起こったかのような捉え方をしているという点は (19) と同様であり、その意味では (20) も仮想変化表現の一種であると考えてよいだろう。

ここで、場所目的語構文の形容詞的受身について整理してみよう。場所目的語構文の形容詞的受身は、動詞が示す行為の結果であるか否か、一時的な状態か恒常的な属性かという観点から以下のように分類できる。

表 1. 場所目的語構文が形容詞的受身で用いられるときの用法

	先行する行為	意味
A. The truck was loaded with hay.	○	一時的状態
B. Her eyes were loaded with tears.	×	一時的状態
C. John was loaded with talent.	×	恒常的属性

このように整理すると、B の表現は、A のような通常の形容詞的受身と C のような仮想変化表現の中間に位置することがわかる。したがって、今回扱った表現の中に一時的状態を表すものと恒常的属性を表すものの多義性が認められることは、本稿の分析にとって問題となるわけではなく、A から C までの自然な連続体が形成されていることを示していると言える。

<sup>8</sup> (19) と (20) の違いは、Carlson (1980) が言う個体レベル述語 (individual-level predicate) と場面レベル述語 (stage-level predicate) の違いに対応していると思われる。Carlson は、John is intelligent のように時間の流れに左右されずに成り立つ属性を個体レベル、John is available のように時間の流れのある一時点にのみ成り立つ状態を場面レベルと呼んで区別した。二種類の述語は、共起する表現の違いをはじめ、様々な文法現象に反映される。



## 6. まとめ

本稿では、場所目的語構文が形容詞的受身で用いられると、それらの単純な組み合わせでは説明できない独自の構文になることがあること、それは仮想変化表現として捉えられることを論じた。場所格交替動詞のこのような振る舞いは、従来の研究では見過ごされてきたものであり、移動物目的語構文と場所目的語構文の違いを解明する手掛かりのひとつとなると考えられる。

今回取り扱うことができなかったが、移動物目的語構文でも拡張例が成立することがあるようである。

- (21) a. Stars were scattered across the sky. (移動物目的語構文)  
 b. The sky was scattered with stars. (場所目的語構文)

(21) ではどちらも先行する行為が想定できない。移動物目的語構文の拡張可能性については場所格交替動詞の間でも多少差があるようであり、個々の動詞のより詳細な研究が必要だろう。また、なぜ場所目的語構文に多く形容詞的受身の拡張例が見られるのかという問題も取り上げることができなかった。今後の研究で考察を深めていきたい。

## 参考文献

- Carlson, Gregory N. (1980) *Reference to Kinds in English*. New York: Garland Publishing.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎 (2009) 「状態・属性を表す受身と過去分詞」影山太郎 (編) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 120-151. 東京: 大修館書店.
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』 100-126. 東京: 大修館書店.
- Laffut, An and Kristin Davidse (2002) English locative constructions: An exercise in neo-Firthian description and dialogue with other schools. *Functions of Language* 9: 169-207.
- Levin, Beth and Malka Rappaport (1986) The formation of adjectival passives. *Linguistic Inquiry* 17: 623-661.
- Matsumoto, Yo (1996) Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds.), *Spaces, Worlds, and Grammar*, 124- 156.

Chicago: University of Chicago Press.

日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法 3』 東京: くろしお出版.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*.

Cambridge, MA: MIT Press.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

## 辞書

『ジーニアス英和辞典』第4版 (2006) 東京: 大修館書店.

*Longman Dictionary of Contemporary English*, third edition (1995) Harlow: Pearson Education.

*Longman Dictionary of Contemporary English*, fourth edition (2003) Harlow: Pearson Education.

*Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*, fifth edition (2006) Glasgow:

HarperCollins.

# An Extended Use of Locative Alternation Verbs in English: From the Viewpoint of Subjective-Change Expressions

Daisuke NONAKA

dnonaka200@gmail.com

**Keywords:** locative alternation, adjectival passive, subjective-change expression

## Abstract

In English, verbs including *load* and *smear* can occur in two alternate constructions with essentially the same meaning (the locatum-as-object variant *John loaded hay onto the truck* / the location-as-object variant *John loaded the truck with hay*); this phenomenon is known as the locative alternation. It has been pointed out that the location-as-object variant sometimes extends its meaning when used as adjectival passives (e.g. *John was loaded with talent*). The present paper argues that the combination of location-as-object variants and adjectival passives can be recognized as a distinct construction and that this is a kind of what Matsumoto (1996) calls subjective-change expression.

(のなか・だいすけ 東京大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員)